別紙１

新宿御苑１００年の概要

１．明治前期・中期　－近代園芸の導入口

新宿御苑の大部分の地は、江戸時代においては高遠藩主の内藤家屋敷でした。

その屋敷地を明治５年（1872）に政府が買上げ、殖産興業政策の一環として、農産物の試作研究を目的とした官営農事試験場「内藤新宿試験場」を設置しました。

ここでは、海外から取り寄せた苗木や種子を使って野菜、果樹、花卉などの栽培研究が行われ、マスクメロン、福羽イチゴ、洋ランなど各地の名産に育った作物を数多く産出し、わが国における近代園芸の発展を先導する役割を果たしました。

明治１２年（1879）には宮内省の所管になり、「新宿植物御苑」と改称されて、皇室の禁苑となりました。

２．明治後期～昭和前期　－皇室の庭園

明治３４年（1901）から、後に近代園芸・造園学の祖といわれる福羽逸人（ふくばはやと）氏によって、フランス人造園家アンリー・マルチネーの設計に基づいた大規模な庭園としての改造工事が行われ、日比谷公園と並び最も早くヨーロッパの造園様式を取り入れた庭園が明治３９年（1906）に完成し「新宿御苑」と改称されました。

同年５月１日、明治天皇の御臨席の下、日露戦争の戦勝祝賀会を兼ねた開苑式が開催されました。

この時期の新宿御苑は、皇室の庭園として大正天皇の大喪の礼などの儀式、「観桜会」や「観菊会」などの行事や、ゴルフなど皇室のレクリエーションの場として利用されました。

また、外周部に配置された園地や温室では、皇室献上用の野菜、果樹、花卉などの栽培や、動物の飼育が行われています。

３．昭和中期～現在　－国民公園

第二次大戦後、旧皇室苑地である新宿御苑は他の「国民公園」とともに、昭和２２年（1947）の閣議決定「旧皇室苑地の運営に関する件」により、一般開放されることになりました。

昭和２４年（1949）に、厚生省（現厚生労働省）が直接管理する「国民公園新宿御苑」として一般公開されました。

その後は高度経済成長期を経て、大都市内の緑地としての利用が定着し、現在年間約１００万人の方々が利用しています。

また、現在でも内閣総理大臣主催の「桜を見る会」をはじめ市民が主催による各種行事が開催され、サクラの名所としても利用されるようになりました。

昭和４６年（1971)、環境庁発足に伴い同庁に移管され、現在は環境省の所管になっています。

来る平成１８年（2006）には、「新宿御苑」と改称されてから１００年を迎えることとなります。